

被 爆

— 50 周年を迎えて —

広島県立賀茂高等女学校

昭和 21 年 3 月卒業生

再版に当たって

今年被爆50周年を迎えました。全国や広島県内でも戦後50周年を節目とした、いろいろな行事が考えられています。

私達も、今年50周年と言うことから、45年を迎えたときの記録文と、50周年に当たって書き改めて頂いた方の文や、新しくこの記念誌に思いをお寄せ頂いた方の文を加えて編集を致しました。

私達は既に老齢基礎年金を受ける身となりました。諸記事に掲載される時は「老人」という言葉で表現され、自分では「まだ若いのに」と思っているにも自然には勝てないようです。

この被爆記念誌を改めて読み返し、二度と再びあの恐ろしい戦争を起こさない国造りをし、一層の世界平和が築かれることを願ってやみません。

平成7年（1995年）7月

江戸 芳江

はじめに

被爆45周年を迎えました。15才で広島の救護活動に行った私達も、いつしか還暦を祝う年齢となりました。あの原爆の惨状を、口にし、思い出すのさえ避けてきた私達でしたが、年を重ねてきて少しずつ忘れかけている原爆の恐ろしさを、若い人達に伝えなければと考えるようになりました。

幸いにして、この趣旨に早速賛同下さり、寄稿頂きありがとうございました。皆さん全員が、脳裏に焼き付いている原爆の様々を苦しくて悲しい、そして怖い思い出を語って下さっています。一人ひとりのそれぞれ違った感覚で体験を綴って頂いているので学徒動員から原爆投下、救護活動のことなどをお陰で再認識することができます。賀茂高等女学校にその当時の楠瀬広島県知事より、感謝状が届いていましたので、コピーをして巻末に綴じました。こんなことがあったのですね。

原爆体験記のことを高崎先生（岡原）と、加藤先生にお話ししますと、大変お喜びになり、直ちに玉稿をお寄せ下さいました。皆さんと共に感謝申し上げたいと存じます。

最後に、私達の体験を語り継ぎ、どうぞ平和な世界になるように祈って止みません。

平成3年（1991年）7月

江戸 芳江

もくじ

はじめに・再版に当たって				
1	ともに生きむ老いつつも	高崎	スマ子	先生
2	夏	加藤	宣子	先生
3	被爆の思い出	脇坂	雅子	
4	原爆の思い出	菅田	敦子	
5	被爆45年を迎えて	太尾田	トミエ	
6	平和への祈り	西村	美輪子	
7	原爆の思い出	貫目	サチエ	
8	原爆の思い出	武田	幹枝	
9	原爆そして広島8月6日	石山	信子	
10	被爆50周年に寄せて	藤友	倫子	
11	昭和20年の夏	那須	実枝子	
12	平和への祈り 翔せませ折り鶴	西川	美恵子	
13	学徒動員・原爆の思い出	大和	淑子	
14	被爆者救護体験記	岡崎	喜久子	
15	絆	升川	和子	
16	原爆に思う	森川	愛子	
17	15才の夏	立田	登美子	
18	ピカドンに思う	岡田	孝子	
19	原爆の思い出	愛原	喜久子	
20	原爆の思い出	田坂	万千枝	
21	原爆体験記	榊原	富喜江	
22	被爆体験記	向井	友子	
23	原爆の思い出	福田	利恵子	
24	原爆の思い出	綿芝	昭子	
25	原爆の思い出	山本	寿美子	
26	被爆45年を迎えて	森本	ヒデ子	
27	過ぎし日を想う	小川	和子	
28	原爆で思うこと	鎌田	礼子	
29	45年前に思いを馳せて	辻川	澄子	
30	原爆に思う	江戸	芳江	
31	戦後50周年を迎えて	木村	政子	
おわりに				

ともに生きむ老いつつも

高崎 スマ子 先生

私達の生ある限り忘れぬあの日、うら若かった15才の女学生の少女らも、30才だった私も、広島駅下車と同時に繰り広げられた焼け野原と、収容所の被爆者たちの裸身は半ば腐って、目の回りにも口の回りにも傷口にも、盛り上がるうじの行列に驚いた。夥しい蠅と異臭の中に、目を見開いたまま横たわっていた生死も知れぬ赤鬼のように赤チンを塗られた無残な人の群れ、現代の少女たちなら目を覆い泣き叫びながら逃げるであろう。

凝然として立ちすくんだ私は、ああ、これが、万物の霊長の間人間と言えるか、人間の尊厳は失われた。あんまりだと、憤りと悲しみに体が震え、涙が噴き出して止まらなかった。私はむごい地獄絵図を見たのだ。現在でも一瞬思い出し胸を突き上げるときがある。

そのときから私達の脳裏に深く彫り刻まれて、悲しみの糸のようにつながって46年の歳月は流れた。

戦争を生き抜き、共に原爆救護活動に挺身した友も、次から次へと白血病、ガン性の病気で帰らぬ人となった。辛い事である。暗然と思いに沈む事がある。また巡りくる8月6日の原爆記念日、賀茂高女としては唯一人の犠牲者として、今に行方不明のままの3年生の上田茂子さん、広島市のどこの瓦礫の下で眠っているのかと哀しい。

今の広島市のすっかり整った大都会らしい様相を見るとき、地下の夥しい土と共に眠る人々の叫びが、あの日を知る人の胸には響いてくる思いがする。昭和27年の原爆記念日に、除幕された平和公園の碑文は横書きに「安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませぬから」と書かれている。これは、故 雑賀忠義 広英文学教授の執筆されたものである。

8月6日は歳々に巡ってくる。決して昔話で終わったのではない。私達一人一人が、平和のためには地球上から、核兵器廃絶を強く訴え続けていかなければならないと決意するものである。

その当時の賀茂高女卒業生たちは、戦争中は、広海軍工廠で15才の動員学徒工員として、私達は共に空襲下にめげず一筋にお国のために働き、終戦後は休む間もなく広島市原爆救護隊として出動し、焼け跡の各収容所で被災者の看護や炊き出しに必死に働いた。

思うに、彼女達は本来賀茂高女四年生の学徒でありながら、常時共に戦い抜いてきた戦友だったのである。この筋金入りの学友達は、それぞれの分野で地方のリーダー

として活躍している。家庭の婦人としてもどこか違うものを持っている。滅私奉公と言え古いが、エゴでなく利他に力を尽くそうとするものを持っている。そんなところが当時の4年生国語科を少しの間でも教えた私は嬉しい。このごろの世相を見て、つくづくと人間の尊厳性について考え込む時がある。

今回、江戸さんは、「学友の原爆記念誌を、集まった原稿を自分でワープロを打ち製本冊子として配布したい」と電話で聞き私は感激した。多くの時間と経費がかかる仕事である。願ってもない私達の青春記念誌を作って頂いて有り難い。大切に保存して取り出しては思い出としたい。皆さん、貴重なたくさんものを心からお礼申し上げます。ありがとう。

セーラー服の乙女も六十歳 戦時勤務
動員学徒 広島市原爆救護学徒たりき

夏

加藤 宣子 先生

- ・被爆者救護に汗あえ励みいし少女四十余年後の声受話器に聞こゆ
- ・キリスト教に深く入信せし君が被爆証明記すひたすらなる面
(高崎先生のこと)
- ・入市後の広島の惨語りしが いつかおし黙し思い分かつも
- ・被爆証明に残生当てんと告らす君と並びて 作成す教え子の証明書
- ・あわれ彼の日原爆死せし女生徒のみ墓に詣ず君と来りて
- ・命の際に少女の脳裏に走りしもの思いみんとして我のおののく
- ・被爆前の産業奨励館写真ありておりおりの記憶あつく顕ちくる
- ・被爆者らに飯すすめいし乙女子よ救護の日々を廃墟に炊ぎて
- ・グラウンドに死者葬りつぐ夜々の炎黙し見ていき看りの乙女ら
- ・被爆者の救護に励みいし生徒ひたすらなりしを今も忘れず
- ・乙女らがひたに取り組みし旋盤の底ごもる音聞こゆる日あり
- ・彼の日々の救護女生徒教職を選び励みで今日退任す

「平和」がひたすら念じられる夏の日々でございます。
お声をかけて頂いたので、思い出の中から拙い短歌を話して見ました。
皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り致しております。

被爆の感想

脇坂 雅子

広島 あの原爆は、一生忘れることのない悲しい想いが込み上げてまいります。賀茂高等女学校時代、皆様と共に、原爆の恐ろしさを救護隊と言う体験によって感じたことです。大河小学校だったと思いますが、今でもいろいろ頭に浮かんで来ることは、夜もろくろく休まず看護に当たって、死を目前にして何か言いたいけれど、声が出ないままでこの世を去って行かれた人々、誠に言葉では言い表せない苦しい姿が、目に焼き付いております。

今思われますことは、自分の身に引き替えて考えますと、どんなに辛い日々だったでしょう。想像に絶するものがあります。このことによって、人の運命、命の尊さ、はかなさを痛感いたしました。

最後に、私達の犠牲になられた人々の為に、心よりご冥福をお祈りいたします。

原爆の思い出

菅田 敦子

「ピカーと光ったから、明日の新聞にはピカドンと出るぞ」と言われた言葉は、戦後 40 年あまり過ぎた今も、はっきり覚えています。私は、その時学徒で広の工場にいました。

賀茂高等女学校に帰り、広島段原小学校へ先生に連れられて救護に行き、兵隊さんと一緒に原爆で倒れた人達の世話をしました。「痛い痛い」と言って死んで行かれた人達を覚えています。死んだ人は、学校の運動場の広い所に穴を掘って、黒いコールトンをかけ火をつけて焼かれたように思います。私の頭に浮かんで覚えているのは大きな体格のいいお母さんが、丸裸ではぶせになって背中の腰のあたりに大きな穴が空いていて、その穴の中にウジがわいていたことです。焼けただれて泣きながら、赤チンを塗ってもらうのに並んで順番を待つのを、私達が手をひいて連れて行ってあげたのを覚えています。本当に戦争は厭です。40 年以上過ぎた今私が振り返って見ますのに、生かされているのが本当に不思議に思い有り難く思う次第です。人生 80 年とは言うものの健康で過ごしたいものです。

被爆45年を迎えて

太尾田 トミエ

広島に原爆が投下されて46年、昨秋被爆者救護に当たった当時の思い出を綴るようと、お便りを頂いたときも久しく文章を書くなどと言うことから遠ざかり、億劫で一度はペンを持ちましたもののそのままにしておりました。再度お便りを頂いたとき、娘がちょっとでも良いから書いてみたらと促されて、大事な記念誌の1ページを汚させて頂くことにしました。

戦後長い歳月の様々な思い出の記憶も薄れていく中で、被爆者の救護に当たったあの当時のことは、今も私の脳裏に鮮明な思い出として蘇って参ります。

終戦を迎え、学徒動員が解け帰宅し、すぐさまクラスの皆さんと一緒に広島の被爆者の救護に当たりました。広島駅に降り立ったとき、見渡す限り焼け野が原で、所々にポツンポツンと鉄筋の建物の一部残すのみの、悲惨な状況に驚きました。私達が救護に当たったのは大河小学校（国民学校）で、そこには多くの罹災者の方たちが収容されていました。

8月の炎天下蒸し暑さの中で、被爆者の方たちの苦しみは、想像に絶するものがあると思いました。整備された今頃とは違い、蚊や蠅の多い時代でございました。被爆者の傷口にブンブン蠅が止まり、傷口にはウジむしが大きく育ってうようよしているのです。一番私の印象に強く残っていることは、臨月ぐらいであろうと思われるお母さんが爆風で衣類が飛び散り、体には何も纏わず右手で恥部を押さえ、手は火傷でくっついたまま目を閉じ虫の息でした。そばで三才か四才位の男の子が、「お母さん」と呼び掛ける声にも答えはなく、二日後位に息を引き取られました。

小学校の片すみに大きな四角の穴が掘ってあって、畳の上に乗せたまま私達はその穴まで運び、係の人が油をかけて火葬されるのです。何人も何人も私達は穴まで運びました。夕方、元気そうに廊下を歩いておられた学生さんが、翌日は血を吐いて亡くなられました。毒ガスを吸われて傷がないのがかえって仇になったようです。私はこの時の悲惨な状況を終生忘れることは出来ません。

あの時、お母さんの側にいた坊やは、今はどうしておられるでしょうか。必ず立派を社会人として、強く成長して下さっているものと確信しております。

今の恵まれ過ぎた平和の中で、優しい夫、息子や嫁、娘夫婦、元気を7人の孫たちに囲まれて、この上ない幸せを噛みしめる時、二度とこのような悲惨な体験は、味わわせたくないと思っております。

こうした願いの中にも、一昨日はまた悲しいイラクとイスラエル湾岸戦争が始まりました。一日も早く終結し、平和な世界が戻ることを念じ筆を置きます。

主人が「原爆のことを書くのなら、わしの事もちょっと書いてくれんかのう」と申しますので「被爆者の救護の体験記じゃけん、お父さんの事は書かれんよねえ」と申しますと黙って笑っておりました。

実は主人も爆心地より 1.5 キロメートルの幟町小学校で被爆し被爆手帳一号なのです。頭の毛は全部抜け、歯茎はがたがた高熱に何日もうなされ、生死をさまよったそうです。当時は原爆で髪の毛が抜けると後何日かで死ぬると言われたようです。今でも夏になり半袖になると、ちょうどやくざに刺されたような大きなケロイドが出るので、知らない人は怪訝な顔をされるので、いつも私が「これは原爆の傷ですげえ」と言い訳をする始末です。でも主人は「これは原爆の勲章じゃけん」と笑っております。結婚当初、母方の祖母や両親が、ピカにあつとるけん長生きできんのじゃないかと心配してくれました。結婚 43 年、今も元気で頑張ってくれています。

修学旅行も新婚旅行もできない時代だったので、後 7 年で金婚式を迎えた時「是非外国旅行に連れて行ってもらったら」と子供達も言ってくれますし、今から楽しみにしております。

平和への祈り

西村 美輪子

私は、原爆投下後の大河小学校での救護活動を、思い出すまま書き綴ってみます。

いつも最初に思い出すのは、長い大きな時計のかかっていた部屋での光景です。幼児との別れに死に化粧を施す母の姿、泣きながら紅をさす指先の様は、居合わせた者はその心情を思い、皆貫い泣きをしたものでした。また多く運び込まれた負傷者の中に、呼吸困難に陥り、体一面青い斑点のできた老婦人、苦しい様子を見て、すぐに優しい言葉をかけながら体をさすってあげた友人、私は青い斑点が怖くて躊躇してしまいました。この時の友人のことは、今も尊敬の念で思い出します。その老婦人は、数時間後私達の見守る中、一人一人に感謝のまなざしと、頷くようにお辞儀をされ息を引き取られました。医師の手当も受けられず、名前も告げられないまま逝かれた人達、さぞ残念だったことと思います。

夜は、二階の広間で仮眠する皆の所に、異様な臭気がします。誰かが「そっと夜の来るのを待って、亡くなった方々を、砂場に集め焼いているのだ」と教えてくれました。ある時は、外来者用の仮設診察室の方で、「ギャーッ」と言う悲鳴を聞いて、友人二、三人で駆け付けるとちょうど医師が、女の子の指が一塊になっているのを、剥がしている所でした。断末魔にも似た悲鳴、私達はその場から逃げたが、悲鳴が追って来るのです。私達には地獄を見た思いでした。火傷の手当をする時にも、油紙を剥がすとうじ虫がわいていたのを思い出します。

あの日から戦争のない 50 年の時が過ぎました。この平和が、多くの犠牲者の方々の上に成り立っていることを忘れてはならないと思います。改めてご冥福をお祈りし、今のこの平和がいつまでも続くことを心より神に祈りたい。

原爆の思い出

貫目 サチエ

原爆，いやピカドンと言った方が私達女学生には通用語になっていた。昭和 20 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分，広島方面の空がもくもくと黒煙をはいていた。広島ガスが爆発したらしい。みんな寝不足のどす黒く油のしみた顔で空を見上げた。私達 3 年生は，広の補機工場へ学徒動員で働いていた。飛行機の部品を旋盤を使ってねじ切りの仕事をしていた。3 月か 5 月かどちらか分からないけれど，大空襲で補機工場が一部焼けた気がする。その大空襲の時はまともに戦争を見た。焼夷弾が落ちたり，アメリカの B29 の爆撃機が飛んで来た。下から攻撃してもなかなか命中しなかった。爆弾が落ちて来るたびに物凄い爆風だった。

私達はマッチ箱と言っていたが，地上に箱のようを物が建っていたその中へ目と耳をよそって伏せていた。とうとうトンネルの中に機械が持ち込まれ，そこで仕事をするようになっていた。三直交代で私達は 8 月 6 日は夜中の 12 時から朝まで勤務をした。ついに敗戦になり広の駅で，〇〇海軍中尉と一緒に敗戦になったと言うことで大泣きをした。これが工場で働いた最後の別れだったと思う。「花も蕾の若桜五尺の生命ひっさげて…」と朝晩軍歌を歌いながら工場へ行ったものだ。終戦になり賀茂高女に帰校した。また広島へ原爆被災者の食事の支度に動員された。私は，本川小学校へ行った。日にちははっきり覚えていない。広島駅から暑い中の焼け野が原を歩いて行った。途中電車が立ち往生になっていた。また馬がそのままの姿で死んでいた。本川小学校の二階が私達の部屋であった。雨がその晩降ってポツリポツリと雨垂れが落ちてきた。すぐ前の校庭では，毎日毎日患者さんの死体が焼かれていた。何とも言えない異臭が絶えずした。私達の居る場所から 10 メートルくらいの場所であった。食事はお粥とジャガ芋の煮付けを，毎日毎日調理したような気がする。お粥は缶詰の空き缶を三角に切って作った杓子を使ってよそおったように思う。

患者さんは，コンクリートの所にむしろを敷いた上に横たわっておられた。手足の火傷に赤チンを塗っておられた。その火傷には，白いうじがうようよ動いていた。一人の老母さんが「財布を開けて下さい」と私に懇願されたけれど，迷って開けて上げなかった。財布は手製の物であった。患者さんから「水を下さい」と言われたが，これも迷って上げなかった。心残りはいろいろと走馬灯のように浮かんで来る。

焼け野が原にポツンと仮トイレが建っていた。一か所だけなのでそこへ行こうと思うと白骨だらけ，場所を変えても白骨だらけで大変困った。また，そこにはいろいろとメモが書かれてあった。多分尋ねて来られた人が話されたのであろう。背囊と水筒を持ち疲れ切った復員兵さんが，患者の間を探しておられた。

帰途は福屋，中国新聞社の前を通った気がする。子供の泣き声などいろいろと騒音がしていた。なんとも言えない気がした。重い足取りで駅に着いたように覚えている。私の思いのまま書いた。

原爆の後遺症と我思う 兄の病いは長びけるらし(63才死亡)
我と母 原爆検診受けに来つ ベットに並び 採血されぬ

原爆の思い出

武田 幹枝

昭和 20 年 8 月 6 日午前 8 時過ぎ、三直明けで工場より寮に帰り、救急袋、防空帽を取った瞬間、ドカーンと言う鈍い音と同時にぐらぐらと寮が揺れる、向かいの部屋より「へちゃげたあ」と大きい声がする。西側の窓を開けてみると、広島の方に白い雲のような物がむくむく上がって来る。見る見るうちにピンク色を帯びて来た。今に言う「きのこ雲」である。

誰言うとなしに、広島に大型爆弾が落とされ、全滅らしいとの噂が広がる。9日、また長崎にも同じことが起こった。8月15日緊急放送があるとの事で皆広場に集まった。敗戦を知らせる陛下のお言葉であった。

戦争は終わったらしい。「学徒は急いで引き揚げよ」とのこと、翌日16日身の回りの整理をし、夕方までにどう列車に乗ったか今ははっきり覚えていないが、海田より窓から車内に入り、八本松駅ではまた窓から出たことは覚えている。夕方家に着く。学校より下級生により連絡がはいる。明日17日朝8時までに駅に集まり、被爆者の炊き出しに一週間くらいの予定で行くとのことであった。

広島駅に着いて大変驚いた。駅は勿論のこと市内は全く焼け野原と言うより瓦礫の広場と言うほうが当てはまるような感じで一言も出なかった。まだあちこちで煙も出ているし、金庫か冷蔵庫らしいものが赤く焼きただれて変形して横たわっていた。どこをどう歩いたか目印はただ一つとしてない市内を、大八車に米俵を積んで段原小学校方面に向かった。天気もあまり良くない日が続く。焼け残った傾きかけた講堂の中に、大勢の被爆者が男女の見分けがつかない位全身真っ黒に焼きただれ、ぼろ布が下がっているような感じで皮膚がよじれて垂れている。8月の炎天下素足でアスファルトの上を歩いて、毎日治療のための行列が出来、ただ火傷の上に赤チンのようなものを塗って頂き帰って行かれる姿は、全く生き地獄の感じがする。人、人、人間とも思われない状態である。ただ呆然として私共の頭、口、ペンでは、この現状はどう伝えてよいか、実際に見た人でなければ説明出来ない。朝、おむすび、たくわん二切れずつ頭の所に置いて上げる。前日の夕食を残した方は、「今日は欲しくない」と言われる。昼食を運ぶと既に事切れて、必ずと言う位俯せになり、体の下には小さいウジがわいている。

雨の降る日は雨垂れが体の上に落ちる。懸命に位置を移動しようとされる痛ましい姿、手伝ってあげようと体に当たると、皮膚が剥がれるのでどうしようもない。仕方がないから新聞紙か何か紙切れを探して来て体に覆って上げる。夜は近所の民家に泊まる。トイレは講堂の裏にあるため2～3人で行く。電気もない暗闇の中で眠れぬ夜

を過ごしているたくさんの患者さん達は、私達の足音を聞き「ねえちゃん、水、水」と声をかけられるが、禁じられているので足音を忍ばせて帰ってくるが、どうせ駄目な方ならお水をあげればと思いつきながら皆と話す。ほんとに今考えてもやりきれない気持ちである。

食事を運ぶのももう厭になる。毎日朝に夕に4～5人位ずつ亡くなる。同じように始末される。それも運動場の隅に穴を掘り、丸太を渡してその上に亡骸を並べ油を注ぎ一度に火葬される。どんな気持ちで息を引き取られたことかと思う時、とってもせつない涙が出て来る。あれから45年、皆平和で幸福に暮らしている。二度と戦争してはならない。

(前回のこの手記が最後となりました。ご冥福をお祈り致します。)

原爆そして広島8月6日

石山 信子

私はその時15才のあどけない少女でした。あの地獄そのものの8月6日の広島
の光景は、還暦を迎えた今も頭の片すみにはっきりと残っています。私達は、当時
広十一空廠で学問はせず何を作っているのかも知らず、旋盤工みたいなことを
していました。せっかく胸を膨らませて狭き門の県立賀茂高等女学校へ入学出来た
のに、当時は県立の女学校へ進むことが花嫁となる一番良い条件の一つでした。

原子爆弾が広島へ落とされました。私の弟は当時中学1年生でしたが、広島
市内へ家屋疎開のため、学徒動員として出ていました。それが行方不明で、何
でも広島へ1トン爆弾が落とされたとかいろいろデマが飛び交いました。私は
すぐに広から歩いて自宅に帰りました。母と妹は学校からお寺といろいろ運ば
れて来る負傷者が、もしや弟ではと探しに行きました。私と父は広島へ出まし
た。広島は町の町は死の海と化し、広いと思っていた広島の何と狭いこと、己
斐も横川もすべて手の届きそうな所に感じました。それが火の海であとは死
体と負傷者の山で、何とも言えない生き地獄でした。あちこち探し7日の明
け方、比治山の大きな楠の木の根元で、弟は死体で見付かりました。兵隊さ
んに1杯の水を貰って「家に帰りたいのう」と言って生き絶えたそうです。父
はそれを荒縄で背負って約20キロ離れた家まで歩いて連れて帰りました。途
中で人が「痛かろうに縄がくいこんで」と言ったそうです。父は「何ももう分
からんですよ」と言って我が子の重さも忘れて連れて帰りました。家に着いた
時、既にうじ虫がいっぱい体をはっていました。顔は3～4倍に水膨れと火傷
で二目と見られない姿でした。白い上衣と帽子ゲートルの所だけきれいな皮
膚で後はボロ布を引き裂いたように肉も皮もぶら下がり、熱いのと家に帰ら
ないので転がり回ったせいかわらぬ小石が焼けた所の皮膚の中へくいこんで
いました。死体が見付かった者は不幸中の幸いで、身元不明の死体が比治山
の上から下谷までぎっしりありました。

しばらくして、私達は学校からの連絡で救護のため広島に行きました。もう
怖いものも何もないカラッポのような心でただ兵隊さんの命令のまま動きま
した。こんなひどい出来事を2～3枚の原稿用紙にまとめられるものではありません。
また表現できるものでもありません。この時から私の人生観も変わったみた
いです。私も終戦の日当たりから高熱、血便と続いて赤痢と間違えられて隔
離されたり、貧血になったり今考えると原爆のためと知り、今さらのよう
に怖さを後世に伝えなければとしみじみ思うこのごろです。私の人生も原
爆のせいで変わったことも事実です。言いたいこと書きたいことは山ほど
ありますのでこれくらいの文章では満足出来ません。毎年発行をしたいも
のです。そして私達乙女時代の声を後世に残したいものです。

被爆 50 周年に寄せて

藤友 倫子

1月17日未明の阪神大震災は、死者五千人を超す関東大震災以来の大惨事で、戦後50年の節目の幕あけを、こういう形で迎えるとは誰も想像しえなかったことであり、近代都市が一瞬に崩壊した現状をテレビで見て、被爆直後の広島市内の光景が一瞬、二重写しとなった。

勿論、被爆と震災とは当然違うが、都市災害と言う一部の共通点はあるように思う。特に西日本の拠点である阪神地区の被災は日本全体にとっても大きな打撃を及ぼすことは間違いないところだが、70年草木も生えないと言われながら、奇跡的復興を成し遂げた広島をよき先例として一日も早い復興を祈りたいと思う。

さて、広島は今年被爆50周年を迎えた。現在日本は、先進国と呼ばれる国の仲間入りをし、長い間外国との戦いのない年月を過ごし、内政の複雑さはともあれ一応経済大国の国民としての平穏と裕福さに恵まれている。

昨年はアジア大会も開催されたし、曲がりなりにも被爆者援護法も成立することが出来た。

また、原爆ドームを「世界遺産」にと県民ぐるみの広島の願いが進展している。東西の冷戦崩壊後もなお楽観を許さない核兵器をめぐる状況に対し、必死に平和を訴え続けるドームは、被爆都市ひろしまを象徴する記念聖堂であり、世界に類のない文化財でこれを残すことは私達の務めでもあると思っている。

被爆50年を機に、この世の生き地獄を見て来た者として、戦争の愚かさ悲惨さを、意識の中で風化させることのないよう、次の世代に語り継ぎ、平和都市ひろしまの一員として、心豊かに力強く、これからの人生を生きて行きたいと希っている。

手記遅々ところろ乱るる黄水仙

八月六日コップに充たす祈りの水

昭和 20 年の夏

那須 実枝子

私の女学校 4 年生の夏は、既に 45 年も経とうと言う今もそこだけ光が当たっているように、鮮明に思い出されてくる。

原子爆弾は、呉市広町の宿舎の庭に走り出て、あの異様な雲の爆ぜのぼるさまをしばらく見ていた。そこが広島市であったことも放射により、何万の人が焼き殺されていることは勿論、父や中学 2 年の弟が建物の下敷きになっていたことなど全く知る筈はなかった。

終戦後、無事に家にたどり着いていた父と、無傷であった弟との話もそこそこに、私は救護の為、広島へ入って行った。

ところが、8月の終わり頃から弟は高い熱が出始め、広島療養所へ入院することになった。弟は、父に背負われて荷車に乗り、家を出て行った。隣のご主人も付いて行って下さり、長い廊下では背負って下さったことを後で知った。

8月の終わりから9月の始め雨のよく降る年であった。私は、父方の伯父に連れられ、雨の中を療養所へ行った。

病院の窓は開け放たれ、被爆者で、どの部屋も満杯のようであった。弟は息を吸うのが苦しいらしく、「うう…」と声を挙げて呼吸していた。私は走り寄って、背中をさすったが、妹は大声で泣き出した。母は気が狂ったように、氷枕を入れ替えては駆け寄って来る。そして休みなく足をさする。弟の様子は、刻々と苦しさを増していった。あまりに呼吸困難な弟の様子に、私まで息苦しく廊下に出ては深呼吸を試みた。廊下には、七輪など夥しい生活用具が所狭しと並び、大勢の看護の人達の、氷を割る音がカチカチと鳴り続けていた。私の所も母方の叔父が、三原まで氷を買いに行ってくれたらしい。

次の夜、母は「今晚家に帰るから」と言い、私と一緒に帰ることになった。暗い雨の中、母は走るような足早であった。母は、弟の新しい浴衣の寝間着を縫う積もりだったのだ。弟の浴衣の出来上がるまで私も深夜過ぎまで必死に手伝った。気が付いてみると、母は泣き通しに泣いていたようだ。私はこの時、弟は死ぬのだなと思った。母の手裁きの早さは、病院で待っている弟のことをただ思っただけのことであつたらう。その後、弟の体に紫の斑点が、水玉のように散らばって現れてきた。息苦しきは、まるで吠えるような呼吸音となっていた。そこにいるだけで息詰まる思いである。同室の患者さん達も、それぞれの苦しみのように付き添いの父母達は、お互いに情報交換しながら励まし合っていたらしい。

「うちは髪の毛が抜けないから」と父が母を慰めていたけれど、やがて髪も抜け始

め、9月4日弟の呼吸は止まった。

私は、再び救護隊として広島市大河小学校に出掛けて行った。私は我が家のこの大事を付き添いの先生に一息に話してしまった。

これを書いていると、弟の中学入学当時、軍人勅諭を覚えていた姿とか、細い指でゲートルを巻いていた様子など浮かび上がってきて仕方がない。13才の弟の魂が、今夜は私の側へやって来て遊んででもいるのだろうか。

母は、あの悲しみを乗り越えて、今平穏な83才を生き続けている。今度は私達が、親のような気持ちで母を見守っていく番だと思っている。

平和への祈り 翔せませ折り鶴

西川 美恵子

暗い青春1 ページを聞き、後世の平和の為に、戦争の恐ろしさを伝える義務がある
と思い、筆を執りました。

広島駅に降り荒涼たる市街を見た時、あまりの変貌に声もでないまま先生の配置に
従い、友達と大河小学校の救護所の外来患者のお手伝いとなりました。患部を濡らし
膿や血の付いたガーゼを取る辛さに喚ぐ子、我慢する少年と様々。その中でも和服の
若奥様は、救護所に着くと必ず倒れられるので、30 分か 1 時間休まれて治療を受け
て、路地裏へと帰って行かれました。又頭が前後真二つに割れ、赤い脳味噌がいちじ
くを大きくしたように見えている少年は、ときどき自分の力で帰ることができず、戸
板に乗せ祖母と二人暮らしの崩れ掛けた家に運びました。夕方になると、私達大きな
者は、死体安置所である裁縫教室から、腐敗のひどいものや確認の済んだ亡骸を運び
ました。戸板の上にも 1 枚掛けただけの葬式の後、運動場の端にたくさん掘られた
穴に次々と運び、茶毘に付しました。窓からは、一晩中とろとろと青い火が見え、室
内では患者さんの苦しそうな呻き声、親子の死別の嗚咽と、真っ暗な夜の出来事が手
に取るように聞こえ、地獄の釜の上にいる思いでした。そのうち東の空が白み、ご来
迎とはこのことかと思って元気を出して奉仕に励みました。

私の身内にも、原爆の犠牲になった者がおります。傷一つないのに 1 週間足らずで
死んだ者、お岩のような「ケロイド」ができて尚生き残った者、父などは直接被爆し
ていませんが、従兄を探し歩いたためか金たらい一杯の鼻血を度々出し、原爆投下後
20 余年の寿命も癌で終えました。

有形無形の核の恐ろしさを見たり、「戦争は二度とごめんだ」と言う思いを強くし
ております。あのころを思うと、今は夢のようです。音に脅えることなく、食足りて
礼節を忘れてしまったように気がします。今や宇宙旅行の時代、地球上で争っている
時代ではないと思います。誰もが仲良くして、自由に世界を飛び回れる世の中にする
ために一人一人が努力し、向上していくことを願って止みません。

最後に、戦争（原爆）で若い命を散らした諸兄弟の、ご冥福をお祈り致しまして筆
を置きます。 合掌

秋夫や 千の折り鶴 翔せませ

学徒動員・原爆の思い出

大和 淑子

太平洋戦争も日ごとに熾烈となり、忘れもしません昭和20年1月19日、ついに私達女学生（当時3年生）にも学徒動員命が下がり、呉市の海軍空廠へと赴くことになり、小雪の舞い落ちる西条駅頭で、先生方在校生の皆さんから、万歳の声に送られて凛々しく出発して行きました。厳しい訓練を受けてそれぞれの部署につかされ、夜となく昼となく頑張り続けたものです。

寒い冬も過ぎ、花開く春が訪れ、そのころから空襲は一層烈しく、毎日のように防空壕に逃げ回り、そして夏がやってきました。ソ連参戦果てはあちらこちらの玉砕の報道で耳が痛いニュースばかり飛んできていました。ちょうどそのころ私達の工場も、いつ爆破されるかも知れず、山の中の水道に機械など運びこんで仕事に従事し、日夜か弱い腕を奮って油まみれになって働いていました。

8月5日の夜の事です。いつものように軍歌を歌って宿舎を出て行きました。夜勤です。8月6日朝8時の休憩の合図とともに遂道より出ました。腰を下ろして一息付いたころ、パッと閃光が目に入りました。と同時に広島方面と思われる上空より、無気味と言うか異様な雲がむくむく上がっていきます。足が立ちすくんでしまいました。戦局もこんなことだし、「何か起こったにちがいない」そんな予感が脳裏を掠めました。翌日原子爆弾と聞かされ、烈しいためらいが体を揺さぶり続けました。

やがて8月15日敗戦、私達の動員も解除となり、重いリュックを背負って自宅へと帰って行きました。自宅で休息するまもなく、賀茂高女の方より連絡があり、広島へ救護に出向くようにとのことでした。広島駅にようやく満員列車でたどり着いて見ると、辺りは焼け野が原でまだあちこちより煙が出ていました。駅の構内また路面には被災者が溢れていました。地獄絵そのものでした。目を覆いたくなる情景で、話には聞いていたがここまではと放心状態となりました。私達は炎天下徒歩で西署まで行き、そこで配属されたのが本川小学校でした。ここは爆心地に近いだけあって、重症な被災者ばかりで焼けただれた体、顔面は人の様相すら失って、男女の区別も見極めがたい程です。この情景は言語に絶するものがございました。そのうえ飢えに苦しみ傷の苦痛に耐えられぬ人ばかりの収容所でした。私達が出来ることといたら食事係りです。主食のおむすび副食等を運んでいました。副食と言っても乾燥した漬け物だったのです。現在では想像もつかないようなことです。でも喜んで食べるように食べておられました。しかし翌日は様相が変わり、苦しみを訴えながら帰らぬ人となられたのです。肉親とは別れ別れ一人寂しくの死は、心中はどんなだったでしょう。夏の事です。直ちに荷車に乗せて、運動場の隅に掘られた2～3か所の穴の中へ、地方か

ら出動された消防団の人達によって葬られて逝かれました。このようにことが何回も繰り返されました。今日に至っても目に焼き付いて離れません。こんなことがあって良いのでしょうか。あの忌まわしい戦争は二度とあってはなりません。

それにつけても今度の湾岸戦争は、一刻も早く終話し、世界の人々が平和に暮らせる目が来て欲しいものだと願わずにはられません。

被爆者救護体験記

岡崎 喜久子

広島、長崎の原爆投下そして終戦 … あれから 50 年を迎えようとしています。私達もいつのまにか老人と呼ばれる年齢となっています。体の不調を感じながらも、今日の日まで生かされていることをまず感謝しています。

年と共に記憶もうすれ、当時の事を詳細には覚えていませんが、頭の中に強烈に焼き付いている事を少し述べてみたいと思います。

焼け野原となった広島を一望しながら、私達は段原小学校の救護所へと足を運びました。途中出会う人々の顔や手などのやけどの部分に赤チンを塗布され、傷の痛みには皆手を前に垂らして歩かれる異様な光景に驚いたものです。

救護所に着いての私達の仕事は、食事の支度と分配の役割だったと思います。小学校の講堂が収容所になっていたと思います。崩れかけた校舎の一角で炊事をしたように思います。何しろ死臭と悪臭の中での仕事ですので、三日間の奉仕のうち二日目の晩まで食事が喉を通らなかったのを覚えています。お米を平釜で炊いて「むすび」を作るのに、蠅がごまを振った程取り付くのです。その「むすび」と透き通るようなお粥を竹の筒の食器に注ぎ、収容所の講堂に運び分配しました。

その時私がつくづく人とは「衣食たって礼節を知る」と言う格言を痛切に感じました。病む人も介抱する人も、一つの「むすび」を得る為に喧嘩腰なのです。生きる為に … 広い講堂には何人収容されていたのか見当もつきませんが私達が間をくぐって廻る足元にも何人かの死体がありムシロをかけてあり被爆者特有の斑点の足だけがのぞいていたのが頭に残っています。それでも私達は淋しいともコウイとも思わなかったのは不思議です。夕方には校庭の隅で何人かを茶毘にふされるのです。重油をかけて焼かれる光景は葬られると言う表現にはあたらない様に思いました。

人間とはこのような極限に達すれば無感動になるものだろうか、と自問自答したものです。又別室には死期の迫った人ばかり数人横たわっておられ、介護する人もなくやけどはひどく背中には床ずれが出来て穴があき、傷口にはウジがはい回る有り様です。50 才位の女の方が苦しい中から私達にか細い声で「水を頂戴、お姉ちゃん水を…」そんな声を聞きながらも、誰言うとなく「水をあげたら死んでんじゃと」と言って、そこの廊下をす通りして講堂の方に食事を運んだものです。苦しみに苦しむその人達に何の医術としての施し様もない時でも、やはり延命のために水をあげてはいけなかったのだろうか、私はいつまでたっても水をあげなかった事が、とても罪悪感のように思えて忘れることが出来ません。広島から帰って髪を抜けた人、何となく身体の不調を訴えた人いろいろ障害がでた様に聞きました。しかしその当時は原爆のせい

などとは夢にも思いませんでした。原爆症だ、放射能だと取り沙汰される様になったのは、それから何年かたってからの様に思います。ソ連のチェルノブイリ原発事故の残留放射能で苦しんでいる住人の様子をテレビで見ると、当時の広島とよく似ているなと思いました。私達のクラス会のある度毎に、名簿から次々と消えていく級友の方の事を偲ぶ時、なぜか原爆との因果関係があるように思えてなりません。未だに数多くの人達が後遺症に苦しんでおられます。救護活動の体験を通して、このように悲惨な戦争は二度と再び地球上にあってはならをいと痛切に感じるものです。又広島の声として世界に核廃絶を強く訴えなければならぬと思います。

絆

升川 和子

被爆 45 周年を迎え、被爆者のご冥福をお祈り致します。あの日のことは忘れることはありません。私達は広の軍需工場に学徒動員として働いておりました。あの 8 月 6 日の朝は私達は三直でした。真夜中の作業を終えて外に出た時です。もくもくと盛り上がるきのこ雲を見たのは、勿論原子爆弾とは知らず、度重なる B29 だと思いました。その時です。「あ、お父さんだ」と私の側の彼女が叫んでその場にうずくまりました。そして「確かにお父さんを見た。別れにきたんだ。きっと今死んだんだ」と言うのです。「そんな筈はない。お家にいらっしゃるんだから、大丈夫だ元気だ」と慰めましたが、二人とも不安は募るばかり体がぶるぶると震えました。やはり彼女のお父さんは、その日の朝広島の家屋取り壊し作業に、勤労奉仕として出動され犠牲者となられたのでした。

彼女のお父さんのように、それぞれに心を残し叫びながら苦しみつつ死んでいかれたことを思うと、戦争を憎まずにはおられません。目をつむると、今も呻き声が聞こえてきます。それから彼女は元気に働き続けました。

広で終戦となり、私も彼女と貨物列車で真っ黒になり、どこから歩いたのか夜の道をひたすら家に向いました。しかし造賀まではとても生きて帰れないと、泣きながら足を引きずりました。どのようにして今井さんの家までたどり着いたのか分かりません。彼女と二人でその夜泊めて頂きました。ほんとに今井家の皆さんによくして頂き、次の日また二人で歩いて帰りました。あの時嬉しかったこと、そして彼女と二人だったからこそ勇気も湧き、歩いて帰れたと思います。何よりも「絆」を大切に生きていきたいと思います。平和な世界をねがって。

うめき声 今も聞こえる 原爆忌

原爆に思う

森川 愛子

今、私は幸いの中に生きています。生き方について考えればきりが無い事だけど、私なりに現在までを幸いに生きてきて、還暦も過ぎ親兄弟も少なくなっていて、今改めて友達を懐かしく親しく、とても身近な人を感じています。それは一番多感な女学生時代を、家族と離れて生活した苦しく辛い共通の思い出があるからです。その思い出は今大切な私の宝ものです。

学徒動員は、今の世代の親や子供達に考えられるでしょうか。私達は当然のこととして受け止め、学校工場から広の工場へ3交替の夜勤を雑炊だけの食事で働き、楽しみは歌を歌うことだけで、今で言うストレス解消は大声で軍歌を歌う事だけでした。新聞やラジオ、雑誌、勿論テレビもない生活、これが15才から17才にかけての私達の学生生活であり、青春でもありました。8月15日の終戦は広の補機工場で迎えました。この年の4月に4年生になっていました。私達は速やかに帰宅して、すぐ8月17日学徒救護隊として広島に向かいました。そのころの広島は私達にとっては、年に一度か二度父や母に連れられて行く憧れの町でした。この時見た広島の町の光景は一生忘れることは出来ません。何もない焼け野が原は、今でも目を閉じるとはっきり見えます。これが原子爆弾と知ったのはずうっと後のことでした。

私達は本川小学校と大河小学校に分かれて救護に当たりました。15才や16才の小さな俄か看護婦は一生懸命働きました。薬は赤チンキ位しかないし、お医者さんも時には来られないし、岡山医専の学生さんと共に働きました。この時のことはお話しても、この場において共に働き共に泣き、その人達の苦しみを見た人でないと分からないかも知れません。でもこのまま黙ってはいけなくて、二度と繰り返してはいけなくて戦争、原爆を受けた広島だけでなく、東京も3月10日大空襲がありました。日本国中あちこちで随分な被害がありました。でも私達は、今現実に広島の町に生きていて、だんだんと新しい町へと発展をしてします。この発展の陰には原爆で亡くなられた多くの方があることを忘れてはならないと思います。世の中が移り世代が変わり少しずつ薄れていく戦争の痛みを、おりに触れて私達は伝えていかなければなりません。

8月6日この日を絶対に忘れることは出来ません。それは私にとって一番大切なものを失ったからです。この世でたった一人の肉親の弟を…。その時彼は一中の3年生でした。

みんなで語り継ごうではありませんか原爆のこの怖さを…。そして平和な世界を一人一人が築いて参りましょう。

15才の夏

立田 登美子

花も蕾も若桜，五尺の命ひっさげて，
国の大事に殉ずるは，我ら学徒の面目ぞ，
ああ 紅の血は燃ゆる。

白い鉢巻きをきりりと締めて，学徒動員の歌を元気に歌いながら，補機工場に通っていた私達です。夜とはなく昼とはなく警戒警報に悩まされながら…。

昭和 20 年 8 月 6 日，西の空にもくもくと広がる雲を見ました。「アレよ，アレよ」と見る見るうちに青空に広がって行きました。それが原子爆弾だったのです。終戦の詔勅を聞いたのは，それから 9 日ぶりの事です。

「私達の働きが足りなかったから日本が負けたんだ。生きてオメオメ帰れない」15歳の少女達は健気にもオンオンと肩を震わせてみんな泣きました。ここにも戦前の教育の恐ろしさがまざまざと出ているように思えます。

それでも，心の片隅にもう空襲はないんだ，動員生活の苦しみから逃れられる。両親の待っている西条へ帰って，再び学校へ通って勉強が出来る。種々の不安の中でホッとしている部分もあったような気がします。

広から西条へ帰る時の列車は満員で，貨物列車しかも石炭を積む箱に乗せられて，呉線を三原へ，そして山陽本線で西条へと帰って行ったように記憶しています。トンネルを抜けると自分の顔は見えないがお互いの顔が石炭の煤で真っ黒になっているのを見て笑い合ったものです。

懐かしい学舎にたどりついた私達に休む暇もなく，広島への救護活動が命ぜられました。ピカドンが落ちて人々は芋でも転がしたように死んでいて，その焼け野原に，これから 70 年も 80 年も草木は生えないだろうと噂されている広島へ赴くのですから，それはそれは家族の心配も大変なものでした。

広島駅に降り立った私達の目に飛び込んで来た風景は，一望千里と言う表現はこのためにあるのだと思いました。焦土と化した街を歩きながら「国敗れて山河あり」しみじみとつぶやかれた引率して頂いた岡原先生の漢詩の一節が今も耳の底に刻み込まれています。

白いシャツを着た人達が，行き交う背中はまるで緋模様のように蠅がたかっています。崩れかかった福屋の建物はたしか伝染病の患者が収容されていると聞きました。中から子供の泣き叫ぶ声が聞こえ，異様な雰囲気でした。走っていたままの焼けただれた電車も痛々しい姿で放置されていました。

私達は焼け跡で長い間待たされた後、本川小学校に配属されました。爆心地に一番近い収容所です。窓は落ち床も焼け焦げ残ったコンクリートの床の上に、むしろを敷いて被災者が裸同様の体を横たえて苦しんでおられました。

焼けただけ顔は男女の区別もつかない程です。やけどが痛い為夜も昼も横になれない状態の人、さながら肖像画を見るような思いがしました。そんな悲惨な地獄絵の中で、私達は朝昼晩とおにぎりを作っては配って歩きました。とてもおにぎりなど食べられる状態ではない人、硫黄のようなものを吐いて苦しんでいる人、なぜこんな目に合わなければならぬのだろうか、同じ人間なのに、人間が人間を苦しめるなんて絶対許せないと小さな胸を痛めたものです。

あの人もこの人も親にも兄弟にも見取られず、毎日次々と死んでいかれます。夕べ苦しんでいた人はもう今朝はむしろがかけられていました。そして担架に乗せられては運ばれて来て、運動場は死体の山になりました。夜になったら重油をかけて火葬されるのです。

私達は窓ガラスのない二階の教室で休んでいました。運動場で火葬される様子を見ながら…。雨の降る夜などは窓から雨が降り込んで来るので、むしろを掛けて寝たりしました。「まるで醤油麴か味噌麴でもねかしているようなね」と話しながら…。あの人達の尊い犠牲があったればこそ、今の安らかな平和があるのだと思う時、私達はいくら感謝しても感謝しきれないものがあると思います。二度と繰り返してもらいたくない戦争です。

暑い、暑い、苦しい15才の体験は本当に悲惨な苛酷なものでした。

犠牲者の冥福を心からお祈り致します。

ピカドンに思う

岡田 孝子

原爆の体験を語るについてと言うと、あのように恐ろしいことは忘れたい忘れようとしてこれまで生きてきたが、それでも忘れられない記憶があり、それをたどってみたいと思います。

当時は新聞を読むでもなしラジオを聞くでもなく、言われるままに一生懸命信じてきたのです。

当時私達にも学徒動員があり、広の空廠に出動させられました。「欲しがりません勝つまでは」のスローガンにペンを持つより銃を持つことに徹しました。空廠の行き帰りに見るエンドウの花や蝶を見て、あの花の蜜が吸えたらあの実が食べられたらと思う空腹の毎日でした。

工場では三直に分かれ夜勤の番もありました。そんな晩の小休止には外に出て、モンペ・非常袋・防空頭巾といった姿で、土べたに寝転んで星を仰ぎながら、友達と語り合うのがせめてもの楽しみだったのです。工場の行き帰りには意識高揚のため隊列を組み、声を限りに軍歌を唱和しながら歩いたものです。夜は常時モンペ姿のまま寝ました。

夜勤で前後不覚に眠り込んでいた時、「ドーン」という聞いたこともない大爆音に、私は気付いたら宿舎の広庭に立っていました。そこにはみんな不思議と不安な気持ちで集まっていました。「あっ あれは」と指さす彼方に見たこともない大きなキノコの形をしたものが、西の空中に浮いて見えたのです。最近テレビ画面で見られる映像と全く同じでした。

その晩食堂で伝わり聞いた話は、「あれはピカドンで広島は全滅じゃと。ピカーッと光ったと思ったら、物凄い熱が出て広島は火の海になったと。人は焼けただれて倒れたり、今、太田川は人でいっぱいじゃと」とそんな話で持ちきりでした。私はすぐに広島为学校へ通学している弟のことが心配になりました。きっと駄目だろうと悲しくなり、みんなとの話どころではありませんでした。

しばらくしてラジオが流され、昭和天皇の悲しみを胸にさされたような終戦宣言のお声が聞こえました。動員が解除になり、心の中が空洞の出来たような気持ちで家に帰りました。弟が生きていたことが分かり喜びました。

今度は学校から広島へ救護に行く事になりました。広島は見渡す限り、土色と黒い色とに覆われていたのが印象に残っています。やっと焼け残った収容所の小学校につきました。早速降りて大きな平釜でお粥やおかずを倒壊した木で炊き、患者さんに配って回りました。「お焦げが残っていたら下さい」とやっと言える位の声で訴えられ

ましたが、その人だけあげることは出来ませんでした。まだ生きておられるのに何の手当もなく、廊下に横たわっておられました。そんな方の傷口には、ウジ虫がゴソゴソ動いていました。また目や鼻や口の回りに金蠅が群がっていても、追い払う力も尽きているような人も見られました。運動場の隅で亡くなられた人を、トラックで連れて来て、油を掛けて焼かれると言う火が、いつまでもゆらゆらと燃え続けるのを、手を合わせて拝みました。

私達は夢と希望の女学生時代を、戦争の抑圧された生活の中で大きくなりました。戦争が終わって初めて知りました。平和とは何と素晴らしい事でしょう。命の限り生きる事が出来るのです。ひどく惨めな戦争から、生き抜いて再建した平和が、こんなにも明るく夢や希望があるものかと思いました。肌身で直に戦争を体験してきた私達だからこそ、心の底から全世界へ地球の隅々まで叫び続けましょう。

「平和の尊さを守り続けましょう」

「平和を守ろう いつまでも」

原爆の思い出

愛原 喜久子

心の底にしまっていた痛みを思い起こしております。

戦争中は「お国のために」と言う大義名分のもと学徒報国隊として一切の授業を中止して、広空廠に動員され働きました。その当時は国民総力の時代でしたので、15才の少女でしたが、「何が何でも勝つまでは」と自分なりに重大な役割と認識して参加したものです。結果は惨憺たる敗北で終戦を迎えました。広島は原子爆弾により一瞬にして街は焦土となりました。

私達は広より帰宅し疲れを癒す間もなく、原爆罹災者の方々に何とかしなくてはとかりたてられる思いで、広島に救護隊として参加しました。全壊全焼の中で辛うじて残った大河小学校が、そのまま収容所となりました。

そこで救護活動が開始されたのですか、その時の痛ましい様子は、筆舌に尽くし難い惨状でした。何分にも物資はなく人手不足で正式な医師もいなく、岡山医大の学生が手当に当たりました。赤チンだけの治療で傷は化膿してウジがわき、異臭を放つ体は、教室の板の上に新聞を敷いて横たわっていました。髪は殆ど抜け落ち、その驚きと悲しみに慰める言葉もありませんでした。

火傷の重さに耐えられず苦しみついに力尽きて死んで行く人達、軽症のように見えた人が次々と亡くなられ、運動場で火葬されるのですが、お坊さんの先導もなく、お線香の一本すらなく、死を悲しんでくれる身内の一人としてお供えしてくれる事もなく、息の詰まる地獄の有り様でした。また炎天下の中、食糧を毎日大河から本庁まで、大八車を引いて配給を受け取る為に、焼け果てた中を悲痛な思いで歩きました。

この戦争の悲惨な状況を思い出す度に胸が痛みます。45年を経ても尚私の心の中に残る戦争だけは、この地球からなくなって欲しい。二度と犠牲者を出してはいけないと平和への誓いにつながります。戦争体験者の多くが高齢化する中で原爆の残酷さ悲惨さがどんどん忘れられていく今日、亡くなられた家族の人達の代弁者として自らの体験と実感を強く語る事が、今私の出来るささやかさを死者への慰霊であると思いペンを執りました。

原爆の思い出

田坂 万千枝

1990年も後僅かとなりました。今から45年前、1945年(昭和20年)のことです。私達は賀茂高女3年生の3学期に入ったばかりの1月の末、小雪の舞う寒い目でした。西条駅から広の海軍工廠に学徒動員で出動致しました。

仕事場は広駅裏の補機工場でした。15才の少女で三直交代での仕事も致しました。寒い暗い道を軍歌を歌いながら、東谷の寮から工場まで列をなして通いました。また夜中働いて朝疲れ果てて寮に帰り、雑炊をすすって眠るみじめさもありました。戦争もだんだん追い詰められて、空襲空襲で夜中防空壕の中に逃げ込み、母恋しさに涙したことも幾度か…。その頃になると工場は敵機の的となるので、工場の裏の名田山に、大きな広い迷子になりそうな横穴が掘られ、重たい大きな機械が殆ど運び込まれて、夜も昼も煌々と電気の灯ったその中での仕事となりました

誰がいつの間にそれだけの大きさをトンネルを掘ったのか、今のように進んだ機械も無い時代に、また若い男の人は殆ど召集でいなかったでしょうに、今でも不思議に思える一つです。

8月6日朝、私はそのトンネルの入口で、あのにぶい音とキノコ雲を見たのです。その時はあの恐ろしい原子爆弾とは知る由もありません。友達の辻川さんが「お父さんが原爆で亡くなった」と泣きじゃくりながら、先生に原爆の恐ろしさを訴えておられたのが、私の耳に入った原爆の初めのニュースでした。お年の女のH先生が「父上を亡くされたのに決められた日時に帰寮するあなたのようなけなげな生徒がいる限り日本は負けませんよ」と慰められた言葉が、今なお私の耳の底に残っています。それから日ならずして8月15日敗戦の日はやって来ました。

私達は身の回りの物をリュックに背負い、列車で西条駅まで帰り、そこから郷田の我が家に暑い暑い日中を2時間近く歩いて帰りました。帰り着くと父が「万千枝帰ったか」と言ってくれた途端、張り詰めた気がいっぺんに緩み、父に取り縋って思い切り泣いたことを記憶しています。後にも先にも父親の前で、あれだけ泣いたのはあの時だけです。両親も今は亡き人です。

工場での疲れを癒す間もなく、学校からの命令で被爆地広島に救護のため赴いたのです。行き先は本川小学校でした。そこでの私達の救護活動の内容は、食事を作りその配膳係りでした。指揮は岡原先生でした。土間にゴザだけ敷いた上で息も絶え絶えに横たわっておられ、傷口はウジがうじうじし、それに顔も判明しない程に真っ黒にたかった蠅、それを追う力など無論ありません。また歩くことが出来なくて土間をはい回っている人、虚ろな目で私達の配る食事をじっと立って待っている人、韓国の人、

今にして思えば 10 日余りしか経っていないのですから，身寄りのない人が多かったと思います。言いたい事，伝えてもらいたい事もいろいろあったでしょうに。私達がいた3日の間にも，次々と死んで逝かれました。あの小学校に何人収容されていたかは知りませんが，肉親と再会出来た生命永らえた人が何人おられたことでしょう。

激動の昭和も終わり元号も変わりました。広島街も素晴らしく復興致しました。私達は年老いて記憶もだんだん薄らいでいきます。しかし戦争と言うものの惨さ，非情さ，原爆の恐ろしさを子や孫に，いろいろな角度から伝えなければならない役目があると思います。 合掌

原爆体験記

榊原 富喜江

学徒動員で広工廠で働いていたのは、女学校4年生の時でした。8月6日出勤して間もなく、隧道の外で朝礼を待っていました。その時ビーと青い稲光があちこちに気味悪く見え、その閃光と共にドンと言う音にびっくりして隧道に駆け込んだ途端に、隧道の中まで、なまぬるい爆風がサッと流れ込んできました。しばらくしてみんな外に出ました。西の空がもくもくと黒煙を上げキノコのように広がりました。それは恐ろしい原爆投下でした。

それから間もなく終戦となり、私達は学校に復帰し、息つく暇もなく学校からの召集で、被爆者の救護に当たる事になりました。「広島は50年草木も生えず、頭髮は抜けるし駄目だ」と言って家の者は心配して止めたが、みんなと一緒に広島へ行きました。

駅前には焼けただれた電車の残骸や、コンクリート造りの建物だけが微かに見え、見渡す限り焼け野が原と化していました。一瞬にして尊い生命が数多く奪われ、建物は瓦礫と化したのです。

私達の班は大河小学校に配属され、救護活動に当たる事になりました各教室が収容所に当てられ、ゴザを敷いた上に痛々しい体を横たえた被爆者の方々が、「痛い、痛い」と言っておられました。当時は医薬品と言っても赤チンを塗る程度でした。夏も真っ盛りで、大火傷を負った人は至る所の傷にウジ虫が発生し、見るのも痛ましかったです。また夜の巡回の時には、どの顔も赤チンキで赤鬼みたいで、その様相は生地獄そのものでした。看護中に、「後を頼む、頼む」と言いながら息を引き取られた方もあり、みんなで泣いたこともありました。水道の水が生臭くて口にするのも厭でした。こうして実際に体験した者でないと、原爆の怖さは分からないのではないかと思います。

今被爆45年の歳月を経て、私達同級生の中にも、この原因で多くの方が若くして亡くなられたのではないのでしょうか。私はお陰で今日まで元気に過ごしてきましたが、もう60才を越え、今後の健康に不安が広がります。幸いに高崎先生のお骨折りにより、原爆手帳の交付を受ける事ができて有り難く感謝している者です。

私達は救護活動を通して得た幾多の体験を基に、今一度忘れかけた原爆の恐ろしさを思い起こし、今後みんなが幸せであるよう祈って止みません。最後に亡くなられました多数の方々のご冥福を心より祈念致します。

被爆者体験記

向井 友子

40 数年前になります。15 才の少女の時です。家では父母に頼り自分の事をすれば良いと思っていた年頃でした。

学徒動員で終戦を迎え、家に帰り明日からは勉強と思ったのも束の間で、人類史上初めての原爆被害の広島へ、賀茂高等女学校救護隊の一員として出動致しました。

8月17日大河小学校収容所に行き、救護及び炊き出しをすることになり、到着すると休む間もなく、その日まで救護に当たっていた軍隊の人達と交代する事になり、仕事の内容について説明を聞きました。一瞬私達にこの仕事が出来るか頭の中は不安で一杯でした。成せばなる、やらなければ大変でした。先生のご指導により大きなお風呂位もある釜でご飯を炊き、お粥を作り、お汁も作ります。おにぎりもかなりの数作るののでてんてこ舞いの連続でした。

大八車を引き焼け野原を一時間以上も歩いてお米や野菜などの運搬に数人で行くこともありました。被爆の日より10日以上も経過しているのに、至る所煙が出ていたり、異様な臭いで言葉に表すことが出来ません。

一日が終わり二日、三日と少しは馴れてくる事もありましたが、いろんな変わった壁に当たります。看護の甲斐もなく他界される人もあり、縁故者のない人などお気の毒でした。火葬にすることなども引き継ぎを受けておりましたが、生まれて初めて死人を見、初めて自分達で火葬にすることは生きた心地ではありませんでした。夜は被害を受け窓硝子もない校舎に寝ていました。幽霊が出て来るようで眠れない夜もありました。

忙しくしているうちに一週間が過ぎ、第2陣のお友達と交代し、家に帰りほっとしました。我が家では安心して眠ることが出来ましたが、一週間後第3陣として、再度一週間を前回と同じ場所に行き、自分の持ち場を遂行致しました。

経験のない仕事の出来た時の喜びは、言葉には表せない自信になり、年を重ねた今も心の支えになっていると思っております。

原爆の思い出

福田 利恵子

「おねえちゃんお菓子ちょうだい、ねえーお菓子ちょうだいよう」と寝たまの姿で、甘えながらおねだりする4、5才位の色白のお人形のようにかわいらしい坊や。顔には、火傷らしい跡や傷も見当たらないその子の後部の腰のあたりに、ポツカリと大きな穴があいていました

手当てと言えは消毒して赤チンを塗り、ガーゼ交換するだけです。その子には付き添いらしい親兄弟は誰もおりませんでした。親が生きていれば探して来るでしょうが、原爆投下後10数日経っているのですから、家族も死んでしまったのでしょう。

終戦後、学徒動員先の広工場からようやく女学校へ帰った途端、広島原爆救護に召集され、本川や大河小学校で給食用おむすび作りや、医師達の手伝いをしていた私達は、そのかわいい坊やを、一生懸命励ましたり手当てをしたのですが、その甲斐もなく数日後息を引き取ってしまいました。その傍らには、小学校高学年か中学1年生位の少年が収容されていましたが、これも家族はいなくて、衛生兵の方々が親身になって励ましたり看病していましたが、ある日次第に意識を失って、うとうとと眠りそうな少年の頬を、二人の衛生兵がたたきながら「眠ってはためだ、目を覚ませ」と大きな声で叫んでいましたが、少年はとうとう息を引き取ってしまいました。衛生兵の方々の泣いている姿が印象に残っています。

各教室や広い講堂は、被災者やその家族でいっぱい、黒こげになった魚のようにひどい火傷を負った人も大勢いて、ウジ虫さえわいている程でした。傍らでは家族が放心したように座っていて、中には一升瓶に米を入れ、棒でつついて精米をしている姿など臙げに思い出される程度で、次第に忘却の彼方になりつつある現在ですが、不思議に坊やと少年の二人の事だけは鮮明に思い出されてきます。

亡くなった人達は、校庭に遺体を並べ材木で焼くのですが、校舎の中には瀕死の重症者とその家族がいるその前で、遺体を焼却するのはまるで地獄絵さながらでした。広工場に動員中、度々の空襲で女学生達は優先して避難させられましたが、女子挺身隊や徴用工員が大勢爆撃の犠牲となり、トラックで運ばれ焼却されたと聞きました。夜勤の時工場に通う道すがら、遠くで火の玉がゆらいでいる有り様を見聞きしてきた後だけに、さほど恐怖心や気持ち悪いと言う意識はなかったと思います。今なら恐怖心で気も狂わんばかりになると思いますが、空襲続きの呉時代は心もすさんでいたのでしょうか。今でもその時の気持ちがよく分かりません。

似島の遺骨発掘のニュースを見ながら、あの校庭の遺骨はどうなったのかと思い出されます。ソビエトの大火傷を負ったコンスタンチン坊やと、あの時の色白の坊やの

顔がだぶってきて、平和な世の中であればこそ、コンスタンチン君を助ける事が出来ました。あの快挙に人々も拍手をもって喜ぶことができたのでしょ。45年以前の戦争中に生まれ、悲惨な死に方をした多くの人々の為にも、今や歴史的な事件になりつつある原爆や、戦争の悲惨さを語り伝えなければならないのでないかとその時代に生き、生き残った者としての責任を考えさせられる今日このごろです。

原爆の思い出

綿芝 昭子

昭和20年8月6日午前8時過ぎ、三直勤務（1日24時間を3班に分け、1班は午前8時から午後4時まで、2班は午後4時から深夜12時まで、2班は深夜12時から朝8時までの三交代勤務）後の寮での夢の中、突然ドカーンと言う物凄い音と共に、爆風で蚊帳が飛び散らんばかり、まるで自分が蚊帳の外に押し出された状態だった。みんなは慌てふためいて救急袋と頭巾を被って、仁方トンネルへと急いだ。その当時私は、何故かどこへ避難しても「死ぬ時は死ぬ」と思ってそのまま眠り続けていた。お陰である「キノコ雲」は見えない。

8月17日、広島市へ救急看護班として3・4年生全員が駆り出され通学班別にそれぞれの地へ赴く。私達は大河小学校だった。広島駅に降り立った一同は唾然とした。あの広島はどこにもない。壊れたビルの瓦礫、真っ赤に焼けただれた市電、それも小さく縮んでしまっている。立木など一本も見当たらない。はるか彼方に宇品の海が見える。阿鼻の世界に立ちすくんだようで、背筋が寒くなる。応急病院となった小学校へ行って又びっくり、各教室は被爆者達が所せましと臥せている。その人達をよく見ると、火傷の患部にウジ虫がわいている。この人達を看なければいけないのだ。しかし、15・16才の少女に何が出来ると言うのだろう。4才位の男の子が火傷の手当で椅子にかけていた。医者は子供の両ほおのガーゼを静かに剥がし始めた途端、その子は両手を頭の横に掲げ、手を震わせながら泣き叫んでいた。阿鼻叫喚とはこのことだろう。今でも、あの時のあの男の子の泣き声が耳に残っている。一見、元気そうな大学生が外来として来た翌日、亡くなったそうだ。私には首を傾げる事ばかりだ。

夜になると、身元不明の死亡者を、運動場の片すみで火葬する風景を見た。「こんな場面は一生の間、二度と見られるものではない。見に行こう」と友人を誘ったが皆尻込みし、二人だけついて来た。おじさん達が薪の上に屍を並べ、又上に枯れ木を乗せ、ガソリンをかけて火を付ける。バリバリと勢いよく炎が上がる。スルメを焼くように人間の手足が動く。何分間位見詰めていただろうか。ふと我に返って、黙って部屋へ走り帰った。何とも言えない思いが胸を締め付けた。この何分間かの出来事が、私の生涯忘れられない被爆体験である。

原爆の思い出

山本 寿美子

今年は被爆 45 年、8 月の原爆記念日には、私も式典に参加させて頂きました。会場はあふれんばかりの人の波で、慰霊碑の前はお祈りをする人の行列が続きました。

原爆が投下された暑い夏、先生に引率されて救護に行った事を思い出しました。当時の広島は、一面焼け跡だったのに、今は高い建物がぎっしりと建ち、食べ物も豊富に揃い、病院も整っています。今の広島に育った人には想像もつかない事だと思います。被爆患者は焼け残った学校に収容され、布団も無い床の上に横たわっていました。

火傷で、顔や体が傷だらけの人。傷口に、ウジ虫がわいている人。命が絶えそうに、苦しんでいる人。意識が無く、寝たままの人。

苦しさや痛さは、言葉では言い尽くせなかったと思います。私達のご飯を炊いておむすび一個を配って回りました。食べ物も薬も不自由な戦後に、早く全快することは望めなかったと思います。十代の私には、どのように救護してよいのか分からず、少しでも楽にしてあげる事は出来なかったのです。

夜になると、広場の隅の暗闇の中で、赤い火がぼうぼうと燃えていました。「あれは亡くなった人を焼いているのだ」と聞いて、体が震えるのが止まらず、狭い所で眠れなかったのを鮮明に記憶しています。こんな哀れな姿の人生の最後でよいのでしょうか。大切な命、若い命を、原爆で数えきれないほどの人を苦しめ命を奪う事は許されません。

原爆で亡くなられた方の、ご冥福を心からお祈り致します。

被爆 45 年を迎えて

森本 ヒデ子

昭和 20 年 8 月 6 日、私は旧制女学校の 4 年生で、広工廠の方へ学徒動員の一人として兵器を造る為、私達女学生も三直交代制で夜昼なく働いていました。原爆投下のあの日は、二直番の夜勤でまだ寝ていました。

物凄い爆音で目が覚め、いつものごとく敵機来襲艦砲射撃とばかり思い、どこへ退避しようかと西の窓を開けますと、もくもくと上がるキノコ雲、それはそれは物凄い勢いで雲が大きく広がっていきました。これがピカドンと言われている原子爆弾で広島が全滅と後から分かりました。

さて 8 月 15 日。私達女学生は終戦と同時に動員が解除され、学校復帰の為家に帰りましたが、その足ですぐに原爆投下の広島へ救護班として再び動員されました。

そこで見る広島は、かつての駅前に並ぶ旅館や賑やかだった街並みが跡形もなく消えて、一面が見渡す限りの瓦礫の山と化して、何の遮るものもなく、福屋の建物と比治山がすぐ目の前に見えました。

そこで県の指令を受け、私達は原爆患者が収容されている大河小学校へ行きました。市内の病院は皆焼けて、僅かに残っている小学校が仮設病院として、多くの患者さんが入院や通院をしながら、火傷の手当を受けていました。手当と言っても何の薬もなく、ただ唯一の赤チンを患部に塗るだけで手の施しようもありませんでした。手足に火傷をした幼子達は、通院のたびに私達に向かって「おねえちゃん痛いよう、痛いよう。ゆっくり包帯を取ってね」と泣き叫ぶので、思わず私達は貰い泣きばかりしていました。入院している患者さんは、髪の毛は赤くぼうぼうと焼けただけ、体は赤チンで真っ赤、男の人か女の人か区別もつけがたく、布団とて一つもなく板の間に赤鬼が頭を並べて寝ているようでした。その患者さん達も背中から足にかけて、体中ウジがわいている人が多く、それをピンセットで一匹ずつ取ってあげましたが、これがまたとても痛く共に泣く毎日の看病でした。中でも一番痛々しいのはお産を間近に控えていた人で、十か月の月満たずに早産で、親子共々亡くなられた人達です。

物資の少ないこの時節、ご他聞に漏れず医薬品も殆どなくどうすることも出来ず、昨日までは元気に、地方からの炊き出しのおむすびを食べていた人も、朝は冷たくなっておられた人もたくさんいました。こうして亡くなられた人達は、肉親縁者のお別れの言葉もなく、5・6人一緒に校庭の片すみで、石油を頭からかけられ茶毘にふせられました雨の降る夜は青く燐が燃えて、停電の為灯もないので大変寂しい思いをして友達と一緒に肩を抱きあって寝た記憶があります。

今、新聞紙上で核実験、反核運動といろいろ賑わっていますが二度とこのような惨

めな戦争はしてはなりません。悲しい思いをして死んでいった人達に「ノーモア ヒロシマ」二度と過ちを繰り返さないと心から誓い「どうか安らかに眠ってください」とお祈りしています。

過ぎし日を想う

小川 和子

チェルノブイリ原発の悲惨な光景や話を聞くにつけ、若き日に出合ったあの頃の事を思い起こさずにはおれません。そして、私の目の前に一番に浮かぶのは必ずあの「キノコ雲」なのです。戦時下、学徒動員された私達は、広町の宿舎で三交代でした。あの日私は、夜勤明けの体で眠りについたのでした。凄惨な音で跳び起き、急いでいつもの避難場所に走ろうと外に出たのです。空襲に明け暮れていた私達には、昼も夜もなかったのですから。外に出ていつもと様子が異なるのに気づき、「おかしいな」と広島の方を見ると、あの「キノコ雲」がはっきり見えたのです。

終戦直後で帰校した私達は間もなく救護班を編成、救護所で救護活動に入りました。まず広島に降りてあの一面の廃墟、ポトリと涙がほおを伝わったのが忘れられません。こう書いていると、あの瓦礫の山が見えて参ります。救護所に着いて見た光景は悲惨この上もありませんでした。薬と言えば赤チンのみ、ある日一教室を覗いて見ると霊安室でした。あの年は雨もよく降りました。雨の中校庭の隅で、毎夜見るうす青い炎には震い上がりました。

長い年月、木も草も育たないと言われていた広島の最近の繁栄は、目覚ましく嬉しい限りですが、常に世界のどこかで戦争があり、核の実験が行われている以上、各自何をなすべきかを考え、実行することが犠牲になられた方々に対する鎮魂ではないでしょうか。

原爆で思うこと

鎌田 礼子

東京の連日の空襲に疎開し、しばらくは打って変わったように静かな田園の中に建つ学舎で、気分も和らいでいたが、ここで人類初の原爆の洗礼を受けようとは夢にも思わないことでした。

原爆、難しい原理は分かる筈もないが、当時アメリカには、日本に落とす原爆を研究開発する為に、マンハッタン計画と呼ばれる国家プロジェクトがあり、そこにつぎ込まれる資金、人材、技術は当時得られるであろう最高のものばかり、信じられない程の規模であり、この計画に対する力の入れようは、又想像を絶するものであったそうです。その中で出来上がった物が小さい塊二つ、それも数十万の命を奪う事だけを目的とした物で、その二つは広島・長崎と役割を十分に果たし、45年経った今に至っても、まだ被爆した人々を苦しめ続けています。いかに最高の科学技術の成果であれ、やはり人類で作った最も醜い芸術品と呼ぶべきでしょう。誰でも嫌な事は早く忘れたいと思うものです。歴史の中の惨事は、やがて忘れられ形式的な史実のみが後世に伝わるのですが、昭和20年8月6日白雲一つないコバルト色に晴れ上がった空に目を貫くばかりの閃光を、もくもくと膨れ上がって行くばら色のキノコ雲を、45年経った今でも鮮明に心に焼き付いています。

先日、大学で原子力に関する研究をしている息子と話したところ、息子も原子炉の中でよく原子の光を見ます。それは静かに青く光り、ちょっと神秘的ですらあるようです。食糧も住宅もそれに関する工場、エアコン、冷蔵庫、電車、自動車総てエネルギーなくては動かないと聞きますし、石油、電気と共に人々の暮らしの夢は個々ささやかであっても、集積されて大きなエネルギーとなります。力の限りを注ぎ出来上がった原子力は、平和の中でエネルギーに利用されてこそ素晴らしいと思います。

今後、私達子孫が見る光が、広島で見たそれと決して同じであってはならないと強く思います。

最後に原爆で亡くなられた方々のご冥福をお祈り致します。

45年前に思いを馳せて

辻川 澄子

昭和 20 年 8 月 6 日、呉の海軍工廠へ学徒動員していた私は、三直交代の二直勤務で前夜 12 時頃寄宿舍に帰り、食事や風呂を済ませて夜中の 2 時頃に寝ました。朝 8 時過ぎドドンと鈍い音と共に建物が揺れて目が覚めました。何だったんだろうと思っていると、「あれを見んさい」「ありやどうしたん」「ありゃ何じゃろう」と言う友達の声に跳び起きて、廊下に出て西側の窓を見た途端びっくりしました。それは真っ青なキャンバスに描かれた一枚の絵のようでした。

青い空いっぱい巨大なキノコ雲が、ムクムクと中からピンク色の煙をわき起こしながら浮かんでいた光景は、今でもはっきりと脳裏に焼き付いております。一瞬私の頭の中を「この世の終わり」という言葉がかすめました。巨大な白い雲は、じっと動かさず下方の中からピンク色に染まった雲が、いつまでもわき出ていたのを覚えております。間もなくあれは火薬庫が爆発したんだとか、新型爆弾だとか、いろいろと噂が耳に入ってきましたが、まさか広島がこんな悲惨な状態にをっていようとは夢にも思いませんでした。

昭和 18 年に神戸から疎開し、賀茂高女に転校した私は、広島へは一度も行ったことはありませんでした。数日して学校から救護で行って初めて見る広島は、灰色にくすぶって瓦礫に埋もれた死に絶えたような街でした。所々に残った骨組みだけの建物や窓枠だけの市電等が、墨絵の中のような風景に見えました。でも壊れた建物の中にたくさんの人が、怪我と火傷に苦しんでいるのを見て、息が詰まりそうでした。軍医さんに叱られながら震える手で包帯を巻きました。黒っぽいモンペをはいていた人は、殆ど腰から足の火傷が多いようでした。若い娘さんが、「痛いわあ 殺して下さい」と泣き叫んでいた声が今も耳に残っています。

「75 年間は草一本生えない」と言われた広島は、今緑豊かな平和を街に蘇りましたが、その陰に多くの人達が後遺症に苦しんでおられる現在を思うと、このことを子や孫へ語り継いでいかなければならないと思います。

原爆に思う

江戸 芳江

私達の女学生時代は、誠に悲しく暗い時代であったと思います。それは太平洋戦争そして敗戦と言った悲惨な現実があったからです。

思い起こしてみますと、3年生の時被服廠の学校工場となった校舎で軍服の雨合羽を縫いました。そして、やがてその仕事を下級生に譲り、広の航空廠へ動員となり、大きな旋盤を使つての仕事に、責任と恐怖の入り交じった複雑な気持ちの毎日でした。しかも敵機襲来のはざまの中の勤務には限度があり、気力だけの生活でした。

私は、学校工場で働く為に、級友と別れて早く学校へ帰りました。それはミシン修理技術習得の為に、1か月被服廠で学んだ技術を生かす為だったのです。

忘れられない日、昭和20年8月6日午前8時15分、学校工場に出勤しようとして八本松駅で汽車を待っていました。その時ドーンと鈍い音、何だろうと西の空を見ると、あのキノコ雲、今まで見たこともない雲でした。青空の中にポツカリと浮かんだ奇妙な雲、これがあの恐ろしい原子爆弾とは夢にも思いませんでした。

「広島のカス庫が爆発した」と言う声が聞こえました。大変な事になったと思いました。

学校工場が終わり西条駅に出て見ると、汽車から降りる人達みんなが真っ黒な顔で服がぼろぼろに垂れ下がっていて、歩いて帰られるのがやっとの状態でした。「広島で火傷をした」「広島が火事で火の海じゃ」と言う話になんとか分かりませんでした。

しかし8月17日、女学校から救護隊として広島へ行って見て、初めてあのキノコ雲が広島のカ街を全壊全焼し、たくさんの尊い生命を奪ったのだと分かりました。駅舎は吹っ飛び鉄柱だけのプラットフォーム、崩れかけたコンクリートの建物が二つ三つの焼け野が原になり、私達は瓦礫の中の道を辿り、やっと収容所になっている段原小学校へ行きました。

倒壊した校舎を掻き分けて水道を見付け、そこでお米を洗い炊き出しをしました。竹筒にお粥を入れて配ると、やけどでただれた手を差し延べて受け取られるけれど、手を曲げる事が出来ず口には入りません。痛さのあまりの叫び声や呻き声、そして身動きの少ない瀕死状態の人達、まるで修羅場を見る思いがしました。「おねえちゃん痛いよ」「元気出して頑張つてね」と会話した4才位のかわいい坊やが、朝の食事を持って行って見ると、静かに横たわっていました。何の罪もないいたいけな子供の死に、原爆への憤りを感じました。お医者さんの治境も受けず、赤チンを塗っただけの手当で多くの人達の尊い生命が消えました。

僅か 15 歳だった私の頭の中に、ほとぼしり出る焼き付いた被爆の惨状を限られた紙面では書き表す事はなかなか出来ません。

今年また来年と、原爆の日がやって来ます。原爆の恐ろしさを伝えると共に、平和の大切さを語り継ぐ使命を感じております。そして『世界は一つ』の認識を新たにしていって、恒久世界平和に向かって、みんなが努力して参りましょう。

戦後 50 周年を迎えて

木村 政子

今年の8月6日が来ますと、あれから50年長い年月のようですが、振り返ってみますと数え切れない程の出来事があり、どれもこれも昨年のように思い出されてきて、この期間はむしろ短かったようにも感じています。

空襲警報のサイレンで反射的に木によじ登り空を見ると、西の空を黒い大きなB29機が広島方面へ向かって進んでおりました。銀色のキラキラ光る風船のような又パラシュートと思える物が、パッと離れてふわふわと北に流れて行くと思った瞬間「ピカードン」でした。急に広島一中に行っている弟が心配になりました。間もなく真っ黒なキノコ雲がむくむくと立ちのぼり、みなそれぞれに「あれは広島が焼けている煙だろう」とか「いや毒ガスが上っているのだ。こちらに向かって流れてきている」とか大騒動したものでした。何も手につかず落ち着かない気持ちでいると、馬車や車力に被災者を乗せて帰って来る人が続きました。「水、水」と哀願しておられる微かな声も聞こえました。市内の様子を聞いても、火の海でさっぱり分からないとのことでした。弟も頭にいっぱい赤チンを塗って貰って、とぼとぼと帰って来ました。工場のスレートの屋根が壊れて落ちてきたのだそうです。一方私達は敵兵が上陸することを考えて、竹槍の訓練に精出したものです。

8月15日の天皇陛下の終戦のお言葉がショックで、二・三日何も手につかなかった事を覚えています。

そのうち賀茂高女の生徒は、広島の実災者の看病に出向く事になりました。私達は拒む事なく勇んでリュックを背負って汽車に乗り込んだものです。比治山の山崎第一国民学校が、私達西部汽車通のグループの奉仕現場でした。壊れかかった民家が夜の宿舎に当てられました。毎日雨の降る中、朝夕校舎で呻いておられる患者さんの人数を調べて、百人を出る人のご飯を炊くのですが、ほちのようなご飯でおにぎりを作り、副食や調味料は焼け焦げた市役所までリヤカーで行き、配給された物を運んで、患者さんや付き添いの方々に、配って回るのが主な仕事でした。朝な夕なに亡くなられる方を見るのはたいへん辛い思いでした。又体中焼けただれて寝たきりの方々に、ワジ虫がうじうじとはいまくるので「痒い、痛い」と私達に声をかけられるので、紙でこよりを作り取り除いてあげたものでした。そんな哀れな情景、あの当時15・16才の少女達は、生きながらにして地獄を見たわけです。又5才位のチェックの着物を着た男の子が、毎日私達の飯場に来てはおにぎりを食べたり遊んだりしましたが、あまりに着ている物が汚れているので、誰かがカッターシャツを着せてあげ洗濯したのですが、その子がいつの日か姿を見せなくなりました。親か親戚の方が見付かったもの

か、原爆症で動けなくなったのではと皆心を痛めたものです。とにかくピカドンで広島市は壊滅した上に、長雨でなんとも敗戦の哀れさは言いようありませんでした。そんな時でも私達は心底押し潰されてはいませんでした。どうしたら日本は立ち直れるか必死の思いでした。戦死をなさった方の死を無駄にしてはならない、世界の中の日本であることを誇ることが出来、戦争をおこさなくてもよいように、世界の人から大切に扱って貰える国にしなければと反省したものでした。学生はともかく勉学に励まなくてはと、終戦後の半年はいきいきと満員列車の外側にぶら下がってまで、八本松・西条間を通ったこともありました。

あれから50年、そうですわね。少女だった私達が孫や曾孫がいて、一人が14・15人に増えているのですもの。そして昔は考えられない豊かで平和な毎日です。文化の発展で世界中で起こった事が直ちに報道され、私達が知ることが出来るようになりましたが、反面高機能な機械や道具が出回り、私はついていけない羽交いさも感じております。

農業にしても大きな機械を使い、2・3日でパッと農作業を終えると言う具合で、帽子を被って鍬を肩に畦端で、しばし話すと言ったゆったりした風景はほとんど目にする事は出来なくなりました。人が情緒豊かに暮らせないだけではありません。自然が破壊されたり、空き缶や空き瓶を所構わず落として行く、本当に日本人はどうなったのでしょうか。

私達も一人一人が郷土の自然を汚さないように守り、美しい環境を作らないと健康な生活は出来ないと思います。この年まで元気に働ける事は、自分の精進だけでは到底叶うものではないと思います。神仏の加護に因って生かされているかに思えるようになりました。年老いてたいして役には立ちませんが、毎日小さい事でも役立つ事を心かけ、平和で楽しい日々を送りたいと考えるものでございます。

おわりに

初回の原爆思い出記録誌を発行してはや5年、月日の流れの速さに驚かされています。それはあまりに世界や日本の情勢が変化しているからです。ソ連と言う国が消え、いろいろと新しい国名で登場しましたし、国内では自民、社会、さきがけ連合で社会党党首の村山富市首相が誕生し、私達の若い頃には想像もしえなかった時代が出現しました。

また最近では、「サリン」事件や「ピストル」犯罪が起きています。学校では週5日制が導入され、人間教育の在り方が問われる時代となりました。ややもすればこの急速な時代の渦の中に引き込まれそうになっていく私達です。でも、私達だけにしか出来ない何かがあると思っています。自分を大切に生きて参りましょう。

45年誌の時には、武田幹枝（松川）さんをご健在でしたが、逝去され今回記載の「原爆の思い出」が遺稿となり、誠に残念でなりません。皆さんと共にご冥福をお祈りしたいと存じます。

被爆の思い出文集は、今回の50年誌を最後にしたいと思います。今一度、この若き少女時代に体験した人間の苦しみを語り継ぎ、往時を偲ぶよすがとなれば幸いです。平和のありがたさをかみ締め、お互い健康に気を付けながら、『生きてよかった』と言える人生にして参りましょう。

志和の郷にて